

『地域研究のためのフィールド活用現地語教育』

平成 22 年度派遣報告書

—インド・発展社会研究所、ネパール語、H22. 9. 12-H23. 3. 3—

平成 22 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程一回生
安念 真衣子

自身の研究テーマについて

本研究の関心はネパールの識字教育と文字文化である。ネパールの識字率は現在約 54%とされている¹。ネパールでは 1950 年の開国以降、国家政策の中で識字教育が取り組まれてきており、今なお NGO や支援団体などにより積極的に行われている。このような実務者の取り組みの一方で、数々の学術的研究も行われてきた。ところが、実務者による報告からも研究者による抽象的議論からも、識字実践が行われている具体的な場面を読み解くことは困難である。さらに、識字に関する研究であるにも関わらず、文字そのものの社会での実践に関して言及されるものは少ない。

そこで本研究では、どのような識字実践が行われているのか具体的な実践の場面を明らかにするとともに、文字という道具の使用場面の分析を通して文字に期待される役割とそれによる変化を明らかにすることを目指している。

研修言語の概要

報告者が研修を行ったネパール語は、インド北東部ベンガル州のダージリン地域およびネパール全土で用いられている言葉である。インドにおいては 18 存在する公用語のひとつであり、またネパールにおいては公用語として全国民の 90%以上が理解可能な言語と言われている²。ネパールは多民族国家であり、諸民族間の共通語としても用いられている。

ネパール語の表記にはサンスクリット語やヒンディー語にも使用されるデバナガリ文字が使われる。基本的には 11 種類の母音字と 33 種類の子音字の組み合わせによって様々な音を表記する。

語学研修の内容について

ダージリンから 50 km 程度のクルンオンという町で、D.N.Rai 先生の家滞り・個人指導を受けた。先生はネパール語の指導は初めてではあったが、42 年間学校で英語を教授していた経験をも活かしつつ親身に教えて下さった。寝食を共にしていたため、ダサイン、ティハール等の大きな祭祀が重なるときは授業の時間を確保するのが困難ではあったが、平均して一日 4 時間程度の個人指導を行っていただいた。

¹ 2001 年国勢調査。

² 野津治人. 2006. 『CD エクスプレス・ネパール語』白水社.

特に初めの一か月は文法や動詞の活用など基礎の学習に当て、指導以外の時間では課題と復習に努めた。また、英語による解説と、持参した日本語の文法書の解説とを照合させることで、より明解に理解するようにした。この時期は、ほぼ毎日 7 時～8 時、9 時～10 時、13～14 時、17 時～19 時が指導の時間であり、その合間に課題、復習を行っていた。

その後の二か月は、リーディングとライティングにかかる割合が増え、地元の学校で使用されているテキストなども用いて読解練習を行った。この期間は、教授する内容が減ったため、授業の時間が減り、読解練習にかかる時間の割合が多くなった。クルシオンでの初めの3か月は読み書き重視の研修となり、また1週間ほど家の中での学習であったため、家の外での会話練習の不足が心配であった。しかし、その後、自身の研究の調査を兼ねてネパールに2か月半程滞在した折、初めの一か月に週5日8時～9時の一時間、会話練習のため語学学校に通い Binita 先生の個人指導を受けて不足を補った。ネパール滞後、ネパール語の上達度の確認と指導のためにもう一度クルシオンに戻ったが、ネパールでの会話練習のおかげで、以前の滞在より格段に意思疎通が図れるようになっていた。

研修期間中に印象に残った体験や経験

「レポートを書きなさい。」研修が始まって2週間、ようやく文字の読み書きだけ知ったばかりの報告者にとって不可能に思える課題を行うこととなった。単語も文法もままならない状態で、外で見たもの、一日の出来事等簡単な文章を書く練習を行うこととなった。すると、今度は「この土地の言語と文化を学びに来た外国人の見たこの町の姿を記事にして地元の新聞に出そう。」という提案をいただいた。書いたものをその場で添削してもらい、より良い表現を教えて頂く、その繰り返しを重ねる中で動詞や時制の使い方を同時に学ぶこととなった。そして、研修開始から2か月後、地元の新聞に掲載して頂いた。一外国人の訪問を喜び、研修の励ましのために尽力くださった先生や親戚の方はもとより、町の皆さん、新聞社の方のおかげでこのような体験をすることが出来、生半可に学んではいけないと学習意欲を向上させられた。

目標の達成度や反省点について

渡航前にはネパール語は全くというほど理解できなかった報告者にとって、読み書きと会話の両側面を学び身に付けることが出来たことは大変大きな収穫である。

反省点としては、ネパール滞在中にコミュニケーション練習が主となり読み書きが少々おろそかになってしまったことである。以前の3か月に比較して「伸び」を感じる事が出来ないでいたこの時期に、もう少し読解練習を重ねることで、より理解を深めることが出来たのではないだろうか、という反省である。否が応でも毎日ネパール語に触れていた日々から帰国した今、コミュニケーション、読み書き両面の学習を継続し、維持・向上させることが今後の課題である。



写真 1: D.N.Rai 先生と



写真 2: 掲載された地元の新聞



写真 3: Binita 先生と